

水環境の社会学

— 資源管理から場所とのかかわりへ —

川田 美紀

(大阪産業大学)

1. 環境社会学における水環境研究

近年の水環境をめぐる社会問題は、多岐にわたっている。海外、とくに工業化しつつある国や地域の問題には、開発にともなう飲用水の劣化や不足、地下からの過剰な揚水に起因する地盤沈下、塩害などがある。日本国内では、それらの古典的問題に加えて、農山村から都市への人口流出によって森林や耕作地の維持が困難になってきたことによる水源地の環境管理の問題なども顕在化している。

本稿は、このような問題を直接論じるものではないが、水環境をめぐる社会問題を念頭において、今後の水環境政策や私たちと水環境とのかかわりのあり方を考えるための視点を提示することを目的としている。

日本の環境社会学分野で蓄積されてきた水環境をめぐる研究は、水環境政策、大規模公共事業、公害問題、資源利用・管理、歴史的環境保全など多様である。したがって、研究動向をまとめるとなるとなんらかの限定をせざるをえない。そこで、本稿では、近年の水環境をめぐる研究のなかから、政策に関するもの、資源利用・管理に関するもの、歴史的環境に関するものの3つに注目し、それぞれの研究群が、水あるいは水環境をどのように捉え何を論じてきたのかを整理する。

2. 水環境への政策論的アプローチ

産業化された社会における主要な水問題の1つは、資源としての水の持続的利用である。しかしながら、環境社会学は資源の持続的利用という社会的な大義をそのまま受け入れるのではなく、生活の現場から水と人とのかかわりの実態を分析することを重視してきた。なかでも、水環境をめぐる政策として、環境社会学分野の研究が大きな関心を向けてきたのは、政府による河川管理であろう。とくに、河川管理政策の変遷に関しては、ダム建設などの大規模公共事業の動向と深く関わることもあって、多数の研究者がさまざまな視点から論じてきた(田中, 1997; 2001; 嘉田, 2003; 帯谷, 2004など)。

政府が依拠する「公共性」の論理に視点をおくと、その変化は次のように論じられている。すなわち、洪水や伝染病対策といった「安全性」確保から、水資源開発といった「生産性と効率性」への変化である。ことに戦後は「利便性と物質的豊かさ」を求めた結果進行した河川や水域の汚染問題の顕在化によって「快適性」「生態的健全さ」へと変化し、近年では自然と人との

「共生」や、異なる社会的主体間の「参加と協働」が強調されるようになってきたのである（嘉田，2003）。

ただ、1997年の河川法改正までの「公共性」は、時代によって力点の置き所を変えながらも、政府による河川の一元的管理を強化する方向にあった。それは、河川に関係する各省庁の競合関係、中央省庁と地方自治体の権力関係を背景にしていた。たとえば、ダム開発などの公共事業計画では、それらの計画や事業の「公共性」と対峙する運動が各地で起きたが、事業を受け入れる側の地域に対して補償（地域整備事業）をすることで、地元自治体や住民の反対の声を封じることになった（田中，2001）。

けれども、各地での反対運動の積み重ねや運動を伝えるメディアの影響などにより、河川管理において環境への配慮や住民意見の尊重が避けられなくなってきた。1997年の河川法改正もあり、政府・行政と住民との関係は対立から協働へと変化してきていると理解されている⁽¹⁾。この改正河川法のもとで、環境に配慮した河川管理が実現するのか、また住民の意見を計画に反映できるのかといったことは、しっかりとした運用の仕組みができるかどうかにかかっているだろう。

政府・行政と住民とのこのような関係の変化によって、帯谷博明は、新しい「専門性」の重要性が高まってきていると述べている。その「専門性」とは、計画策定過程が開かれ、政策当局と住民の協働関係が求められる場合、有効と考えられる地域の個別的・日常的な実践知や生活知を住民自身が掘り起し体系化していく分野横断的な専門性である。それは計画策定過程が閉鎖的であり政策当局と住民が対立関係にある場合、問題解決に寄与すると考えられてきた科学的（対抗的）専門性とは異なっている（帯谷，2004）。

では、どのようにして住民は実践知や生活知を体系化することができるのだろうか。長野県砥川流域協議会における討議プロセスを分析した保屋野初子は、「恩恵／災害リスク」という軸が、上流と下流の人びとを「流域」⁽²⁾という概念でつなぐことを可能とし、治水枠組みの再構成に至ったと論じている（保屋野，2010）。

住民の実践知や生活知をいかに政策に反映させることができるのかという議論は、河川管理の政策だけではなく、現在環境政策を考えるうえで重要な論点の1つになっている。ただ、ここではこの議論には深入りせずに、水や水環境に向き合う人びとの実践知や生活知とはどのようなものなのかを、資源利用・管理についての研究からいくつか紹介していくことにしよう。

3. 水環境の資源利用・管理論的アプローチ

そもそも、なぜ実践知や生活知に注目するのか。それは、身近な環境の保全にあたっては、地域コミュニティが大きな役割を果たすと考えられたからである。そのような立場から環境社会学の分野で水環境に関する研究を蓄積してきたのは、おもに、生活環境主義とコモンズ研究であった。生活環境主義は、人びとが生活していくために、その環境を徹底的に破壊することはないとの考えから、水や水環境と人びとがどのようにかかわってきたのか、利用し続けるためにどのような知恵や工夫があるのか、あるいはどのような経緯で利用されなくなったのか、水環境に対する人びとの認識や自然観とはどのようなものなのか、といったことを論じてきた。また、コモンズ研究も、地域の共同管理によって資源の持続的利用が実現してきた多くの事例をふまえ、人び

川田：水環境の社会学

とがどのような利用・管理のルールをもっているのかということに関心をもち、個別事例を詳細に記述してきた。

それらの研究は、細かな地域の事例分析によって近代化のなかで人びとが水環境と疎遠になっていったプロセスを明らかにしてきた（鳥越・嘉田編，1984；菅，2001；関，2003；2005）。また、水環境と疎遠になることで、人びとは環境に対する関心を失い、河川や湖沼の環境汚染に鈍感になっていく事実も指摘している⁽³⁾。では、水環境と人びととの濃密なかかわりとは、どのようなものなのだろうか。

嘉田由紀子は、所有という観点から滋賀県の余呉湖周辺の地域における人びとの資源利用のあり方を分析し、私有地である水田であってもフナやコイやタニシはどここの田でつかんでもよかったことなどを挙げて、同一の空間であっても対象とする資源や条件などによって利用のルールが異なるという、人びとの重層的な所有観の存在を指摘した（嘉田，1997）。また、関礼子は、河川の資源利用をみた場合、この重層的な所有観に基づく資源利用が、集落内にとどまらず、同じ流域に属し生業を異にする集落間の資源利用においても認められると論じている（関，2003）。

このようなローカルな資源の利用や管理の実態については、コモンズ研究の分野でも注目され研究が蓄積されてきた。その蓄積の過程で、半栽培という自然への関係のもち方も注目されるようになった。とくに水辺といった不安定な空間⁽⁴⁾では、ヨシを典型とするような水辺の植物に見られる半栽培を通じた自然と人とのかかわりが見出されてきた（平井，2008；黒田，2009など）。

これらの研究は、資源の利用を前提にしているところに最大の特徴があるといえる。つまり、資源として使用価値があるからこそ、その環境に対して人びとの関心が向けられ、持続的に利用がなされ、結果として環境が保全されるというものである⁽⁵⁾。

しかし、生活条件の変化から、かつては資源としての価値が高かったものが、現在は価値をもたないケースも増えている。にもかかわらず、その資源を維持管理する活動が自然共存的と評価されると、自然となぜかかわるのかを考えることなく環境保全へと動員される政策を促すことにもなりかねない。そのことによって、自然とのかかわり方は、むしろ単純化してしまったり、自治体の補助金が打ち切られると同時に終わってしまったりする、持続性のないものになる恐れがある（牧野，2009）。

一方で、伝統的な資源としての価値とは異なる新しい価値を対象に見出し働きかけがおこなわれている事例も報告されるようになってきている。離農や農業者の高齢化が進行し、農業用溜池の維持管理が十分に行き届かなくなってきた地域では、溜池をたんに農業用施設と捉えるのではなく、身近に自然を感じることでできる住民全体の共有財（市民コモンズ）と捉えて環境整備をおこなっている（池上，1996；鎌田・池上，2001）。

溜池と同様、農業用施設である農業用水についても、“環境用水”化を図っている地域がある。環境用水とは、①水質保全、②アメニティの保全と再生、③生物多様性保全といった機能を果たす農業用水路や都市水路のことである（秋山，2012）。都市部においては、農業の衰退（後継者不足、高齢化など）によって農業における農業用水路の重要性が小さくなってきたために、用水の価値を見直す試みとして、“環境用水”化が図られているのである（黒田ほか，2012）。

水あるいは水環境に対して新しい価値を見出すことが環境を保全することになるという指摘は、生活条件の変化に対応しながら水あるいは水環境の再資源化を図ることで利用しつつ保全すると

いかかわり方が可能となるという考えに基づいていると考えられる。たしかに、この指摘はいくつかのフィールドでは説得的であるだろう。これに対して、以下に示す中川千草の研究は、たとえば、再資源化が図られず、使用価値がない水環境であっても、かかわりを人びとが維持する理由と方法があることを示唆している。

中川は、使用価値がなくなった浜と地元住民のかかわりを「守り」として描いている。中川が取り上げた事例地の浜は、資源としての利用の機会は減っている。住民が浜と直接かかわるのは定期的なハマソウジを通じてくらいである。自然を資源化しなければ、積極的な働きかけはなされない。けれども、中川は、目に見える働きかけがほとんど確認できなくなっても、住民には浜を「守り」とするという考え方があっていい、「何もしていないという働きかけ」をみることの重要性を指摘している（中川，2008）。

「何もしていないという働きかけ」というのは、矛盾した表現のように思えるかもしれない。けれども、地元住民の浜とのかかわりを目に見える「物理的なかかわり」と目に見えない「心理的なかかわり」というように分けて考えてみるならば、物理的には何もしていない、けれどもそこに存在することを認めていて、何かあれば物理的にかかわる用意もできている状態と理解することができる。

このようなかかわり方は、その環境の資源としての使用価値の大小にはかならずしも左右されない。もちろん、資源としての使用価値があれば利用するだろうが、使用価値がなくなったからといって、ただちにその環境とのかかわりが切れるというわけではない。次節ではそのような資源として水環境を捉えるものとは異なる系譜に位置づけられる研究をみていくことにしよう。

4. 「場所」としての水環境と人びとのかかわり

歴史的環境に関する研究には、むしろ水環境に限られてはいないが、水と関連ある事例を取り上げた研究が意外と多いことに気づかされる。歴史的環境保全の社会学的研究は住民生活の舞台におもな関心をおいており、そこには水が組み込まれていることが多いからであろう。たとえば、野田浩資の滋賀県甲良町の水路の事例研究（野田，1999）、堀川三郎の小樽運河の事例研究（堀川，1998；2000）、片桐新自や森久聡の鞆の浦の事例研究（片桐，2000；森久，2005）などを挙げることができる。

滋賀県甲良町の集落を流れる水路の保全活動の事例を歴史的環境の観点から論じた野田は、自然環境をめぐる問題領域が「客観性／科学性／普遍性」によって特徴づけられるのに対し、歴史的環境は「主観性／文化性／地域性」によって特徴づけられる領域であると述べている。そして野田自身が取り上げた水路の保全活動を、後者の「主観性／文化性／地域性」の領域に位置づけている（野田，1999）⁽⁶⁾。

歴史的環境保全における論点にはいくつかあるが、その代表的なものの1つに、「場所」をめぐる議論がある⁽⁷⁾。堀川は、小樽運河をめぐる歴史的環境保全運動を事例として、土地には「空間」と「場所」という二面性があり、道路建設に最適な用地として運河を捉えていた行政は運河を「空間」とみなしていたのに対して、保存運動を展開した人びとは、運河を記憶の詰まった固有の「場所」として捉えていたと述べている。つまり、保存運動は、都市計画によってかけがえ

川田：水環境の社会学

のない（取り換え不可能な）「場所」が「空間」化されることへの抵抗運動であった（堀川，1998；2000）。

また、脇田健一は、農家の人びとにとっての「空間」と「場所」を次のように論じている。すなわち、かつての水田や灌漑水利網は「濃密な関係性」を生きることによって再生産してきた「場所」であったが、圃場整備によってたんなる稲作生産の「空間」になったというのである。さらに、この「場所」については農家の人びとはその価値をうまく説明することが困難であると指摘している（脇田，2001）。

「資源」として普遍的な使用価値がある場合には、環境の価値や、なぜそのような環境を維持したいのかを説明することは容易である。それに対して「場所」は、個別的で主観的なものであるから、説明が困難なのだろう。けれども、他者に説明することが困難であるということは、価値がない、あるいは不要であるということと同義ではもちろんない。

それでは「資源」としての水環境と人びとのかかわりと、「場所」としての水環境と人びとのかかわりは、具体的にはどう異なるのだろうか。このことを考えるにあたって、鳥越皓之の次のような調査時の話が興味深い。鳥越は、長崎県島原市の浜の川で地元の町内会長に浜の川の水を利用する理由を尋ねた。水道水よりおいしいとか、洗い物をするのに便利だとか、そういう回答を他の人から得ていたが、町内会長は返答に窮した様子であった。このことから鳥越は浜の川の水を利用する理由として、水質の良さや便利さ以外の、より本質的な何かがあるように思われたと述べている。そして、それは水とのつきあいが毎日あたりまえのことだという態度だと述べている（鳥越，2012）。

人びとが「資源」としての水環境を利用する際には、その資源がいかに機能的に優れているかが1つの重要なポイントであり、人びとは合理的判断に基づいて資源利用（水環境とのかかわり）を選択すると考えられる。ところが、水場が水道水と比べていかに機能的に優れているかということは、少なくとも浜の川の事例では、水と人びとのかかわりの本質ではないようである。それよりも、水とのつきあいが毎日のあたりまえのこととして営まれている。このあたりまえのつきあいに水と人のかかわりの本質があるように思われたのである。

このような視点に立つと、水環境から得られる資源を利用するという目的をもはやもっていない人びとが、汚れた水環境を再生するという取り組みをなぜおこなうのかということも理解できそうである。「場所」とのかかわりは、合理的か非合理的かという水準で始まったり止まったりするものではないからである。「資源」としての水と人のかかわりは水環境という対象自体の価値によるといえるが、「場所」としての水環境には、しばしばかかわるという事柄に価値を見出す人びとの行動がみられるからである。

西城戸誠は、京都市伏見区濠川の事例を取り上げ、十数年前までゴミが捨てられていたドブ川であった濠川が再生されていったプロセスを論じている（西城戸，2012）。この発端になったのは、川の汚れを見かねた地元企業や、住民が個人的にゴミを拾い始めたことだという。それが、徐々に多くの住民を巻き込んだ河川再生活動になっていった。

また、荒川康によると、栃木県市貝町の多田羅沼は、かつては生業や生活に利用されていたが、県の自然保護条例の保全地域に指定されて以降、人の手をできるだけ入れないような管理に変化していった。放置されている多田羅沼を見るとき、地元住民は守ろうとする志向性ももちながら

も働きかけをしない／できない者の1人として自らを省みることになり、それはある種の「痛み」にも似た感覚をとまなうという(荒川, 2004)。

水環境を「資源」として捉えた場合、使用価値がなくなれば、改変して新たな使用価値を創出するか、放棄してしまえばよい。しかし、「場所」として捉えた場合、環境が汚れていることや荒れていることを、人びとは自分自身の問題として受け止め、荒川が指摘するような「痛み」さえ覚えてしまう。

5. 存在を確認する「場所」

中川のいう浜の「守り」や、荒川が指摘する働きかけをしない／できないことによる「痛み」は、いずれも水環境そのものではなく、水環境と人びとのかかわりの問題を論じていると考えられる。「資源」が対象そのものに関心があるのに対して、「場所」は対象とのかかわりに関心があると考えられる。では、「場所」とかかわることは、人びとにとってどのような意味があるのだろうか。

内山節は、群馬県上野村の川のヤマメやイワナ釣りの解禁日に、村人から解禁日には魚の顔を見て、魚たちも冬を過ごして無事に春を迎えたということを確認しなければならないと説明された出来事を紹介し、村では自然と人間が相互に関係しあうことによって存在すると述べている(内山, 2001)⁽⁸⁾。つまり、人びとは村の自然とかかわり、相互に影響を与え合うことなくして村に存在することはできないのだといえる。

自然とのかかわりを通じて自己の存在を確認するということは、マイナー・サブシステムの特徴の1つとしても指摘されている。マイナー・サブシステムとは、たとえ消滅したところで大した経済的影響を及ぼさないにもかかわらず、意外なほどの情熱によって継承されてきた、経済合理的視点からは、なぜその活動が継続されているのか説明がつかない活動である。空間的・時間的限定のもとおこなわれ、単純な技術水準であるため高度な技法が必要とされ、多くの場合、伝統的なもので、技の伝承がなされている。人びとは、マイナー・サブシステムを通して、時間の回帰性を体感し、自己の存在を確認する(松井, 1998)⁽⁹⁾。

このような松井健によるマイナー・サブシステムの議論を引用し、家中茂は、石垣島白保の空港建設反対運動の強固な意思決定の背景に、イノーで展開されてきたさまざまなマイナー・サブシステムの活動を通じて個々人に蓄積された身体性にもとづく経験があったと述べている(家中, 2001)。また、家中は、別の論文で、従来のコモンズ研究は、持続的な資源の利用・管理に関心があったために、厳格なルールと権利・義務関係がともなっているタイトなローカル・コモンズに、より持続性があると論じてきたが、白保におけるイノーの利用は厳格なルールが定められていないオープンアクセスに近いものであるにもかかわらず、埋立計画にたいして強固な反対運動を維持し続けることができたと述べている(家中, 2002)。

「場所」とかかわることによって自己の存在を確認することが可能となるのだとすると、愛媛県の織田が浜埋立反対運動の事例を分析した関礼子の次のような指摘も興味深い。関は、織田が浜の絵葉書購入申込者の購入動機としてもっとも多かったのは開発や自然破壊への不安・憤りであるとしたりうえて、愛媛県出身者や在住経験のある人からの申込数が全体の20.6%を占めてい

川田：水環境の社会学

ることや、他県の海辺近くの出身・在住経験をもっている人、故郷の海が埋立・汚染された経験をもつ人が多いことに注目する。この結果について、関は、織田が浜が、彼らにとって故郷・自らのルーツとして、またはその代替として意味づけられていたと論じている（関，1997）。

6. 環境社会学における水環境研究の独自性

高度経済成長期、多くの人びとが農山村から都市へと移動した。それは、人びとにとって、かけがえのない「場所」との決別であったといえる。しかし、先述した関の織田が浜の事例などが教えてくれることは、身の回りの環境が1人1人にとって固有のかけがえのない「場所」から誰にでも同じようにコントロール可能な均質な「空間」へと改変されていくなかで、「場所」との決別を選択したはずの人びとが、自らの存在を確認することができなくなるという思いに駆られたのではないかということである。なぜなら、「場所」が「空間」化することによって、「場所」とかかわることによって自らの存在確認が可能であった人びとも、「場所」とかかわって生きる固有の存在ではいられなくなってしまうと考えられるからである⁽¹⁰⁾。

「場所」が「空間」化するということは、人びとが自らの存在を確認することができないというだけの問題にはとどまらない。近年、災害対策の文脈から人と自然とのかかわりのあり方が再検討されるようになってきているが（原口，2010）、洪水常習地において、比較的被害の小さい洪水が、住民に大きなインパクトを与えたのは、その洪水がこれまでとは異なっており、住民がもっていた洪水に関する常識では理解できないものだったからだという指摘もある（金子，2012）。このことから川が固有の場所であれば、人びとは、代々蓄積してきたローカルな知を使って洪水対策（川とかかわること）ができるが、川が「空間」化することによって、ローカルな知をもって川とかかわることができなくなる恐れがあると考えられるだろう。

水は、人間が生きていくために必要不可欠な「資源」である。そのことに疑いはない。しかしながら、安全な水が必要なだけ手に入れば私たちは幸せに生活することができるかというところではなさそうである。以上の研究動向から指摘できることは、生活のなかで水や水環境が価値ある「資源」である場合にはもちろん、そうでない場合にも、私たちは水や水環境とかかわることそのものに意味を見出すことがあるということである。それは、地域に固有な水や水環境とかかわることによって、私たち自身が固有の存在であることを確認することができると考えられるからである。

以上みてきたように、環境社会学における水環境研究の独自性は、小さな生活世界における水環境と人びとのかかわりを、生活者の立場から検討していること、さらに、「資源」の利用という目に見えるかかわりだけでなく、「場所」との目に見えないかかわりも重視していること、これら2点が挙げられる。

水環境政策立案にあたっては、よりマクロな観点から、かつ総合的に検討がなされることになる。そうなれば、これら2つの観点と他の観点との間に矛盾や葛藤が生じることも予想される。ここで論じてきたような観点を、いかに政策に反映させることができるのかということも、今後の環境社会学に問われているといえよう。

注

- (1) 改正河川法においては、その目的に従来の「治水」「利水」に加えて「河川環境の整備と保全」が盛り込まれ、河川管理計画の策定にあたっては住民の意見を取り入れることが明文化された。
- (2) 森林の資源利用の歴史的変遷をたどり、流域社会の隆盛を論じている三井昭二は、近世には森林と河川は多様な利用がなされるコモنزであり、コモنزに支えられた「流域社会」が成り立っていたが、近代以降は河川政策や高度経済成長によって「流域社会」が解体し、それが近年になって環境や地域が注目されるようになって、ふたたびコモنزや流域が見直されるようになったと述べている（三井，1997）。
- (3) たとえば、菅豊は、手賀沼の水質汚染が全国一位の記録を長期間保持し続けるほどまでに汚れてしまった背景には、もちろん、周辺に居住する人口増加があるが、人びとが手賀沼から「縁なき者」になっていったこと、それによって沼を守る、保全する意識を減退させていったことがあると指摘している。手賀沼では、かつてはさまざまな自然資源が利用されており、その持続的利用のために沼の環境が保全されていたが、それらの資源の使用価値が小さくなっていき、新住民だけでなく、資源利用をしてきた旧住民までもが「縁なき者」になっていった（菅，2001）。
- (4) 水辺という不安定な空間では、多様な資源利用がなされていることが多く報告されているが、人間によるコントロールが困難であり、単一の目的からの利用という観点からは非効率的であるため、開発の対象となってきた。
- (5) 嘉田は、村落空間における資源利用の考察を通じて重層的の所有観を見出し、重層的資源利用のルールが、“働きかけ”と“資源的価値”の2つの要素の相互関係によって決まると論じている。
- (6) 近年になって、むしろ、このような、主観的なものの重要性が指摘されるようになってきていると考えられる。たとえば鳥越は、私たちが身近な川と付き合いたいと思うようになった理由として、20世紀が合理化の時代であり、理にかなったものを肯定する一方で、さまざまなものを捨て続けたが、そのなかに貴重なものが含まれていたのではないかと論じている。それは、伝統に価値をおいていた時代の産物ともいえるやすらぎであり、そのような感性をともなった関係や雰囲気である（鳥越，2006）。
- (7) 歴史的環境保全をテーマとした論文ではないが、海外の事例研究では、福永真弓がマトール川を事例とした流域環境保全の合意形成の議論において「場所」を分析上の鍵概念として議論を展開している（福永，2010）。
- (8) 内山は、このような互いに結ばれながら相互に影響を与え合って存在していることを「交通」と定義する。私たち人間は技を用いて自然との間に「交通」をつくり、自然を発見していくが、技は経験を通して蓄積していくものであり、個人の歴史と地域の歴史とを内包している。したがって、自然は、歴史や記憶を内部にもつ技の継承によってみつけだされるものであり、ローカル性を離れることができないと論じている（内山，2001）。
- (9) このようなマイナー・サブシステムの特徴は、メジャー・サブシステムと質的に大きく異なっており、その違いとは、メジャー・サブシステムは、機械化と技術改良が積極的におこなわれたことにより、自然のこまやかな変化と人びとの交渉がなくなってしまった点である（松井，1998）。ちなみに、マイナー・サブシステムを論じる研究蓄積のなかでも、水辺でおこなわれるマイナー・サブシステムの事例報告は多い。松村正治は、竹富島と小浜島の事例研究のなかで、陸と海のマイナー・サブシステムを取り上げ、「土地の多元的ポテンシャル」という観点から、海のマイナー・サブシステムに注目している。農業をメジャー・サブシステムとしてきた島の人びとが、陸では土地の効率的利用の必要性に迫られ、一元的価値判断のもとで土地を改変し、「土地の多元的ポテンシャル」を縮小させていったのに対して、海では陸と比較して「土地の多元的ポテンシャル」が縮小されずに済んでおり、マイナー・サブシステムを通じた多様なかわりが保持されているという（松村，2002）。
- (10) なぜ、いま、このようなことが問題になってきたのかということには社会経済的条件の変化がある

川田：水環境の社会学

だろう。このことを考える手がかりとして、マイナー・サブシステムが2つの異なる社会経済的条件下でおこなわれるという松井の指摘がたいへん参考になる。1つは、第一次産業の機械化が不十分で、生産物の換金も部分的である場合、もう1つは、第一次産業の近代化が十分におこなわれた後である。これらの2つの様相では、マイナー・サブシステムのもつ意味も別のものとなっているという（松井，2004）。

文献

- 秋山道雄，2012，「環境用水の成立と展開方向」秋山道雄・澤井健二・三野徹編『環境用水——その成立条件と持続可能性』技報堂出版。
- 荒川康，2004，「自然環境をめぐる問題の位相——栃木県市貝町多田羅沼を事例として」『環境社会学研究』10：75-88。
- 福永真弓，2010，『多声性の環境倫理——サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』ハーベスト社。
- 原口弥生，2010，「レジリエンス概念の射程——災害研究における環境社会学的アプローチ」『環境社会学研究』16：19-32。
- 平井勇介，2008，「ムラのヨシ場利用からみた空間管理——茨城県かすみがうら市崎浜集落を事例にして」『村落社会研究ジャーナル』14(2)：28-37。
- 堀川三郎，1998，「歴史的環境保存と地域再生——町並み保存における『場所性』の争点化」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12 環境』東京大学出版会，103-132。
- ，2000，「運河保存と観光開発——小樽における都市の思想」片桐新自編『シリーズ環境社会学3 歴史的環境の社会学』新曜社，107-129。
- 保屋野初子，2010，「恩恵と災害リスクを包括する住民主体の流域管理に向けて——砥川流域協議会の事例から」『環境社会学研究』16：154-168。
- 池上甲一，1996，「市民コモンズとしての溜池の意味論」『年報 村落社会研究』32：31-67。
- 嘉田由紀子，1997，「生活実践からつむぎ出される重層的所有観——余呉湖周辺の共有資源の利用と所有」『環境社会学研究』3：72-85。
- ，2003，「琵琶湖・淀川流域の水政策の100年と21世紀の課題——新たな『公共性』の創出をめぐる」嘉田由紀子編『水をめぐる人と自然——日本と世界の現場から』有斐閣，111-145。
- 鎌田さやか・池上甲一，2001，「都市化地域における農業用溜池の整備と住民参加——大阪府熊取町の事例より」『水資源・環境研究』14：10-20。
- 金子祥之，2012，「むらの領土管理にみる災害文化活用の論理——利根川下流域の新田村落を対象として」『村落社会研究ジャーナル』19(1)：13-24。
- 片桐新自，2000，「港町の活性化と保存——鞆の浦を対象として」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社，80-105。
- 黒田暁，2009，「生業と半栽培——河口域のヨシ原は何によって維持されてきたか」宮内泰介編『半栽培の環境社会学——これからの人と自然』昭和堂，71-93。
- 黒田暁・西城戸誠・船戸修一，2012，「農業用水の“環境用水”化に見る資源管理の編成可能性——東京都日野市の都市における農業用水路の存続をめぐる」『環境社会学研究』18：126-140。
- 牧野厚史，2009，「半栽培から住民参加へ——琵琶湖のヨシをめぐる住民活動から」宮内泰介編『半栽培の環境社会学——これからの人と自然』昭和堂，227-247。
- 松井健，1998，「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民族の技術』朝倉書店，247-268。
- ，2004，「マイナー・サブシステムと日常生活——あるいは，方法としてのマイナー・サブシステム論」大塚柳太郎・篠原徹・松井健編『島の生活世界と開発4 生活世界から見る新たな人間-

- 環境系』東京大学出版会, 61-84.
- 松村正治, 2002, 「竹富島と小浜島の比較環境史——町並み保存運動とリゾート誘致への序曲」松井健編『開発と環境の文化学——沖縄地域社会変動の諸契機』榕樹書林, 115-164.
- 三井昭二, 1997, 「森林からみるコモنزと流域——その歴史と現代的展望」『環境社会学研究』3: 33-46.
- 森久聡, 2005, 「地域社会の紐帯と歴史的環境——瀬港保存運動における〈保存する根拠〉と〈保存のための戦略〉」『環境社会学研究』11: 145-159.
- 中川千草, 2008, 「浜を『モリ(守り)』する」山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学——新しいフィールド学へ』昭和堂, 80-99.
- 西城戸誠, 2012, 「水辺をめぐるまちづくりと学校教育——京都市伏見区・濠川を事例として」小島聡・西城戸誠編『人間環境学叢書1 フィールドから考える地域環境——持続可能な地域社会をめざして』ミネルヴァ書房, 62-82.
- 野田浩資, 1999, 「住民がつくる農村景観——滋賀県甲良町のまちづくり」鬼頭秀一編『講座人間と環境 12 環境の豊かさをもとめて——理念と運動』昭和堂, 192-207.
- 帯谷博明, 2004, 『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生——対立と協働のダイナミズム』昭和堂.
- 関礼子, 1997, 「自然保護運動における『自然』——織田が浜埋立反対運動を通して」『社会学評論』47(4): 461-475.
- , 2003, 「生業活動と『かかわりの自然空間』——曖昧で不安定な河川空間をめぐる」『国立歴史民俗博物館研究報告』105: 57-87.
- , 2005, 「暮らしの中の川——阿賀野川流域千唐仁の生活文化とその変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』123: 35-48.
- 菅豊, 2001, 「コモنزとしての『水辺』——手賀沼の環境史」井上真・宮内泰介編『シリーズ環境社会学 2 コモنزの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社, 96-119.
- 田中滋, 1997, 「河川環境事業としての『多自然型川づくり』——1970年代以降における建設省・河川環境行政史」『環境社会学研究』3: 58-71.
- , 2001, 「河川行政と環境問題——行政による〈公共性の独占〉とその対抗運動」船橋晴俊編『講座環境社会学 2 加害・被害と解決過程』有斐閣, 117-143.
- 鳥越皓之, 2006, 「里川を求める思想——川とつきあいたい理由」鳥越皓之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖大幹編『里川の可能性——利水・治水・守水を共有する』新曜社, 215-225.
- , 2012, 『水と日本人』岩波書店.
- 鳥越皓之・嘉田由紀子編, 1984, 『水と人の環境史——琵琶湖報告書』御茶の水書房.
- 内山節, 2001, 「『自然と労働』についての方法の問題——群馬県上野村をとおして」『国立歴史民俗博物館研究報告』87: 17-33.
- 脇田健一, 2001, 「『体験と記憶』のなかにある『場所』——『弱い語り』を支える調査」『社会学年報』30: 61-79.
- 家中茂, 2001, 「石垣島白保のイノー——新石垣空港建設計画をめぐる」井上真・宮内泰介編『シリーズ環境社会学 2 コモنزの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社, 120-141.
- , 2002, 「生成するコモنز——環境社会学におけるコモنز論の展開」松井健編『開発と環境の文化学——沖縄地域社会変動の諸契機』榕樹書林, 81-112.

(かわた・みぎ)